『國民新報』1940年8月4日

[主張]　新しき自慢

　やをげてをすることになつた。のまかりならぬ、のまかりならぬことになつてゐるのだが、が品をすることにはない。奢侈品猶三ケ月に、しこたまをて、せびらかさうといふもないとはらぬ。

　のをするのはおのなすことであるが、をつかはないのはわれわれ々のけであるべきである。これはおのためであり、のためでありのためであるのだ。がかであるからといつてひたいにつかつていとふものがあるとしたら、はのつとめをせざるものだ。

　、といふことはいづれの、いづれのにいてもであつて、これあるはり、これなきはびた。、でびない[國]があらうか。

　のはぎた。やのである。になをつたものは、のにいてはにひ、きにされてゐる。やでは、一のがづかしくてにられぬではないか。

　をにつけて、をつてくものは、もうらなくなつたやうに、なもの、しいものをしては、あるものは、のにはられないがづいたのだ。やののに、スフの、そしてと、これこそは、のらしいなのだ。もしそれ、スフのがつぎはぎになつてゐるとしたら、もつとにすることだらう。

　しかるに、やれがどうの、がどうの、そんなものをにけて々たるやがあるとしたら、そんなものは、からずにない。かういふはりでへくべきである。そしてから、かゝるがをつやうにつとめやうではないか。

　はいものでにはせよう。にして、れないやうにをけやう。やぶけたはいはせ、つぎしてつかはう。もをし、でかう。さうして、われわれがを、することによつて一にいては、そのをやのにし、他方にいては、をしよう。にいて、にいて、ややてのにいて、これをせしめよう。